市史よもやま話

古信濃川の開発

新飯田から鵜森地先まで、かつては信濃川の本流であった。元禄のころからしだいに干あがったと伝えられ、享保には、新飯田―代官島 三百十八間 鵜森―井戸場 百八十四間で、渡船がゆきかう大川。安永のころ、古信濃川、中の口川枝川、福田川、新飯田川などと土地により異なってよんだ。

沿岸諸村は、高燥で取水に好都合の土地がら。よって、溝口氏の新発田入府の後、すぐに開発されたようだ。正保二年に、

新飯田村 六百六十三石余
鵜森村 三百五十八石余
五反田村 百六十九石余

と、下郷諸村にくらべて高生産で、元禄にいたっても石高に変化はない。

また、上郷諸村の飲料水やかんがい用水とされた。明暦二年上新田地内に沖ノ新保村ほか十六村の入樋がふせられ、春の増水時に下道潟へ引水。安永には新飯田村地内に、新飯田村掛樋上新田地内に、上新田田中新田鵜森村砂押新田掛樋 中の口組戸頭村掛樋 北方村真木新田庄瀬村掛樋 前須田村五反田村兎新田掛樋の取水口が常設されていた。

安永五年、信濃川分水堀割とともに信濃川、中の口川の附け洲と古信濃川、笠巻川の締め切り開発を願いでる者があった。

このため、幕府は検使を派遣し、踏査と地元農民の意見聴取を行った。小吉組の大勢は、取水と排水に不便との反対で、自然に沙汰やみとなった。

この開発は天明、寛政、天保年間にも願いだされる。

開発の経過は不明であるが、絵図を見ると、安永のころから堤外地が広く、川幅がせまく描かれている。土砂のたい積と附洲が進むにつれ小川となり、開発されていったのであろう。

幕末にはほとんど埋まり、小堤防を築いて開発。のち、通水不良のため床さらいを願いでる。

明治に入ると、細流を残しすべて耕地化され、現在は豊かな果樹地帯を形成している。

見直される米――①

日本人の主食―米の消費量は、昭和37年の年間1人平均 118.3㌔をピークに、以後、年々減少の一途をたどっています。しかし、米は自給力 100%のうえ、栄養価は高く、私たち日本人の主食としては、これ以上のものはありません。〝見直される米〟を3回にわたって紹介します。

アメリカでは 成人病の予防に勧める

医療先進国といわれるアメリカの悩みの一つに、肥満や糖尿病、心臓病などの成人病の増加があります。成人病の治療には、食事を中心とする予防が最も有効的とされています。そこで、アメリカでは「食事目標」をたて、国をあげて成人病の予防に乗り出しています。

この食事目標では、脂肪や砂糖の取り過ぎを改め、米や麦などの炭水化物（デンプン質）の摂取量を、これまでの二倍に増やすことを進めています。

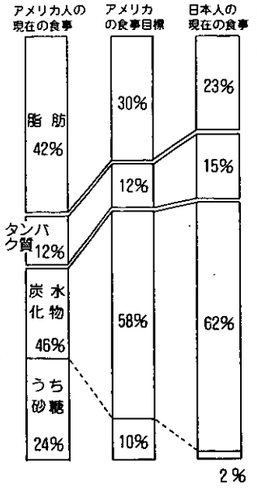
では、日本人の食生活はどうでしょうか。ご飯を主食とし、肉、魚、野菜などを副食に幅広く栄養を摂取し、理想的な栄養摂取バランスとなっています。

ところが、この理想的な栄養摂取バランスも〝米離れ〟や脂肪の取り過ぎでくずれようとしています。このまま〝米離れ〟や脂肪の摂取量が増えると、第二のアメリカになる可能性もあります。

アメリカで成人病予防やダイエット食として注目されている米が、日本では消費が減退しているというのは、皮肉な話です。

米を中心にした食生活。そして、理想的な栄養バランスを改めて考え直してみたいものです。

日本・米国の食事内容の比較



ご相談ください

心配ごと相談

悩みや心配ごとは、気軽にご相談ください。秘密は守ります。前もって相談内容を連絡していただければ、より詳しい回答が得られます。

□**とき** 毎週水曜日 午後一時から三時まで □**ところ** 老人福祉センター

詳しくは、同センター（☎㉓三〇九六）へ。

交通事故相談

□**とき** 四月八日 午前十時から午後三時まで □**ところ** 市役所二階市民相談室 □**相談員** 県交通事故相談員

詳しくは、市民生活課消防交通係（☎㉓二一一㉘二二〇）へ。

税務相談

□**とき** 四月十三日 午前十時から午後三時まで □**ところ** 市役所三階会議室 □**相談員** 新潟税務相談官

詳しくは、税務課市民税係（☎㉓二一一㉘二四四）へ。

私も一言

耐える心を

S・Yさん（下茨・主婦・43歳）

現代農村の思想が混乱し、さまよっています。若い嫁さんたちは、子どもを姑にあずけて働きに出ます。年老いた姑は孫の面倒を見、ケガでもさせたら申し訳ないと思い、子守りに精を出しています。それに、炊事や農作業にも気を配る毎日です。心の安まる暇もありません。つくづく世の中は変わったと思います。私たちが若いときは、姑や夫に気を配っていました。いまは、若い者にきらわれないように気を使う毎日です。

農村も家中心の思想から、夫婦中心の考えに変わりつつあります。古来の家族主義だけが絶対という考え方は捨て、親と子、姑と嫁、夫と妻お互いに人権を尊重し合っていかなければ……。

でも、自由に生きる教育を身につけた若い人たちには、耐える心を説いてもナンセンスと笑われます。私は、何事にも体の続くかぎり、耐える心を持つことは必要ではないかと思うのです。

子どもにきらわれないように、また、一家の主婦としてがんばらなければ……。

健康コーナー

保健センターご案内

受付時間　午後1時～2時

種別	とき	対象者
幼児検診	4月16日	54年10月生まれ
	17日	53年3月生まれ
乳児検診	15日	55年9月生まれ
	21日	55年12月生まれ（新飯田・茨曽根・庄瀬・臼井・大郷・鷲巻地区）
	22日	55年12月生まれ（白根・小林・根岸地区）
結核予防接種 ツ反接種	21日	55年12月生まれ（新飯田・茨曽根・庄瀬・臼井・大郷・鷲巻地区）
ツ反判定 B・C・G	22日	55年12月生まれ（白根・小林・根岸地区）
	23日	21日にツ反接種した子
	24日	22日にツ反接種した子
安産教室 参集時間 午後1時	13日	妊娠初期の人
	20日	妊娠中期の人
	26日	妊娠後期の人

百日咳　ジフテリア　破傷風 三種混合予防接種（1回目）

□**対象者** ①52年7月1日から54年3月31日までに生まれた子は、3回接種する。（ただし、昨年2～3回接種した子は除く） ②51年7月1日から53年3月31日までに生まれた子で、昨年2～3回接種した子は、5月か6月の接種日に1回だけ受けてください。

受付時間　午後1時30分～2時

対象地区	とき	会場
新飯田（全域）	4月8日	地域生活センター
庄瀬（全域）	8日	
茨曽根（全域）	9日	
小林（戸頭、田中を除く）	9日	
臼井（西笠巻、引越、下赤渋を含む、古川を除く）	10日	臼井公会堂
大郷（下赤渋、上・中・下笠巻を除く）	10日	地域生活センター
鷲巻（西笠巻を除く、上・中・下笠巻を含む）	13日	
根岸（全域）	13日	
白根（諏訪木～中央通り以南戸頭、田中を含む）	14日	保健センター
白根（五六の町以北～保坂古川を含む）	15日	産業厚生会館

□**注意** 予防接種手帳の三種混合接種の問診票に、必要事項を記入し、押印のうえ母子手帳と一緒にお持ちください。からだの具合の悪いときは、かかりつけの医師に接種してよいかご相談ください。

日曜・祝日の当番医

都合で変更もあります

とき	医院名	住所	電話
4月12日	関川医院	新飯田中町	025374-2002
19日	大野医院	菱潟	72-2930
26日	田中医院	水道町	73-3962
29日	水戸部医院	二の町	72-2313

昭和56年（1981年）

国際障害者年

みんなが参加し みんなが平等に暮らせる よりよい社会づくりを

わたしたちの社会は、いろいろな人間のあつまりであり、人はみなお互いに助け合って生きているのです。
――障害者とともに①――

<テーマ>
完全参加と平等

交流を深め 人間的なふれ合いを

国際障害者年のシンボルマーク 二人の人間が手をとり合い、支えあっている姿で、平等、希望、支援を表現しています。周囲の葉は、国連の紋章の一部です。

障害者にあまり接したことのない人たちの中には、障害者は一般の人たちと全く違っているとか、障害の原因はすべて遺伝によるとか、障害の状態は伝染するとかいった誤解や偏見から同情やあわれみの気持ちで接したり、好奇の目でじろじろ眺めたり、拒否的な態度で接したりする人がいまだ少なくありません。

このような障害者に対する誤解や偏見、あるいはそれらに基づく誤った態度などが、障害者の地域社会への平等な参加を妨げている原因となっています。このようなことをなくするためには、障害をもっているということ自体は特別な問題ではなく、背の高い人や低い人、速く走ることのできる人やできない人というような、身長の違いや運動能力の違いと同じ個人差のひとつであると理解し、ごく自然な態度で接することが大切です。

実際に障害者と接してみると、これらのことがよくわかります。

特に今年は、国際障害者年記念事業などが行われますので、積極的に参加し、障害者と交流することによって人間的な触れ合いをより深めていきたいものです。

市民文芸

短歌

さわやかな鉄の音して窓開けば　若き夫婦の桃選定すみゆ　織田　護

川柳

ドラの音と波が無情に裂く別れ　山岡　フミ
利子付かぬ切手タンスの中に貯め　岡村　清
長男のお古をもらう歳になり　本間　吾朗
ネパールで善意が生きる古切手　中村　尚治
バス旅行知らずに寝顔写される　成田　吉子
出稼地訪問バスに地酒揺れ　髙橋祐四雄
波風の無い家庭にもある不安　吉川　彰
しつけ糸取ると晴れ着が歩き出す　長井　徳市
会長の小宮一直線に来る　今井　七郎
コレクション小さな切手にある奢り　吉川　末吉

中村尚治さん
（五六の町）

【よこがお】終戦時、ビルマで川柳の大家と出会ったのがきっかけで句づくりを。時事川柳を文芸川柳の接点になる句づくりを目標とする。